川津まるごとシリーズNo.1

〔川津公民館運営協議会 2016年（平成28年）8月号〕

朝酌川（あさくみがわ）をまるごと飲む！

（古名：水草川（みくさがわ））

私たちの住む川津地区は、松江市内有数の人口と商業施設などが集中している地域です。しかし、ほんの数十年前まではのどかな農村でした。1970年代以降、急激に変化した川津地域ですが、全国に誇（ほこ）れる古代からの歴史や文化を受け継いでいます。

私たちがあらためて“ふるさと川津”の素晴らしさに気づき、様々な角度から見つめなおすシリーズを開始します。

この企画をきっかけに、その良さに一層磨（みが）きをかける取り組みが始まるといいですね。

初回は、地区内を流れる朝酌川です。タイトルは“朝酌川をまるごと飲む”。どんなびっくりがあるでしょう。

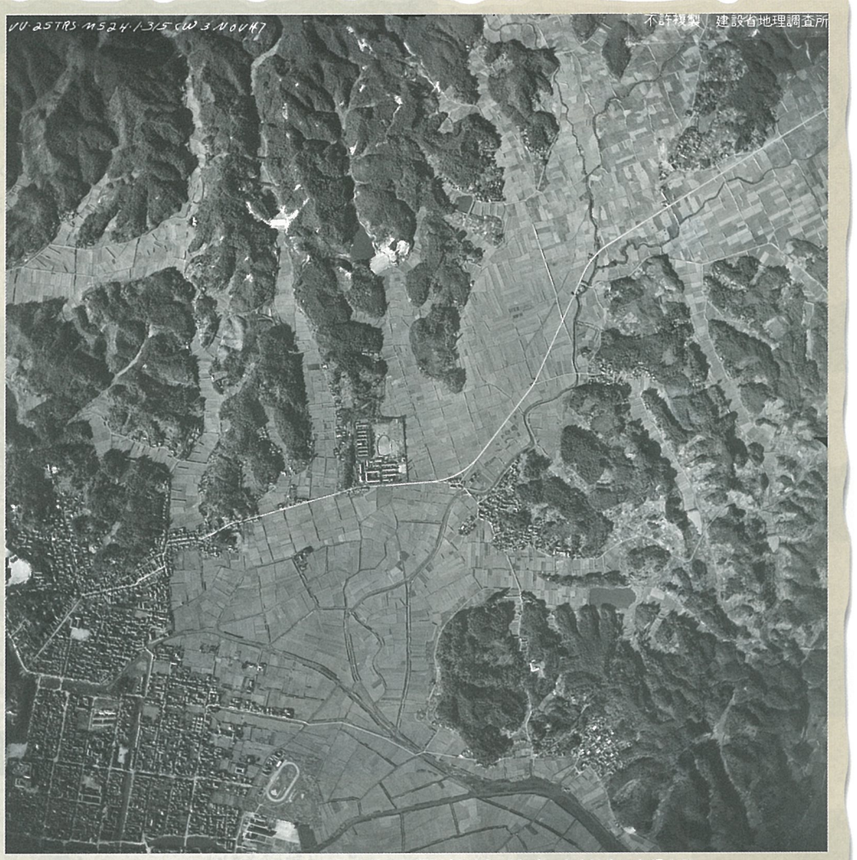
▲朝酌川を上空から望む（北から南へ）

松江平野

松江城から東の平らな平野は、朝酌川が北山山系や嵩山山系から土砂を運んだ沖積地ですが、『堀尾期松江城下町絵図』(1600年代初め)などでは、島根大学南や楽山西側は大きな内湾のようになっています。江戸時代の後期(1800年代初め)には水路が網の目状にめぐらされた田になっています。この200年間の新田開発も興味ある事柄ですね。（『出雲の山･川･平野･海岸』(成瀬敏郎外)を参照）

朝酌川の昔の流れ

朝酌川は、高低差が小さい地域を流れているので、大雨でしばしば氾濫（はんらん）しました。近年では1964年（昭和39年）、1972年（昭和47年）の集中豪雨による水害はひときわ大きいものでした。昭和50年代から河川改修が進み今の姿になりましたが、古い写真や地図では川が蛇行（だこう）していた様子がわかります。



▲1947年（昭和22年）11月3日、米駐留軍撮影（高度2,400m）　中央は今の島根大学

地形の変遷（海の進出と後退）

縄文時代早期(1万年前)は、寒冷な氷期で今より海面が100m以上低かったといわれています。

その後の温暖期で海面が進み、島根半島は“島”で、西川津町海崎地域まで内海となっていました。

徐々に川の上流から土砂の堆積が進み、朝酌川流域も微高地が造られ弥生時代には集落が作られたと考えられています。

（地図は島根県埋蔵文化財調査センター資料から）

★は西川津遺跡の位置を示します

（編集後記）

朝酌川特集は、さらに続きます。次回は河川改修に伴う遺跡発掘から分かった国内屈指の「弥生のタイムカプセル」を紹介します。

朝酌川に一層磨きをかけるため、こんな提案が寄せられています。①川面に船を浮かべ、水面からの景色やイベントを楽しむ。②桜並木や散歩道を充実する。③古代の遺跡やカッパ伝説を“見える化する”などです。

一つでも実現するといいですね。地域の皆さんのご提案をお待ちします。（まちづくり部会編集子）